寄　稿

酪農から伝える命のひびき

きいれ牧場（鹿児島）
鎮　守　喜代美

ここを訪れる子供達のほとんどが、牛を間近で見るのは、はじめてだといいます。最初のうちは、鼻をつまんでいる子もいますが、時がたつにつれて草を手におそるおそる牛に近づいていきます。牛がおとなしいのに安心すると一人、二人と牧柵も乗り越えて、牛の背に乗ったり、子牛と追いかけっこをしたり、すっかり牛との距離は縮まって、牧場は子供達の笑い声につつまれてゆきます。

牧場体験のメインの乳しぼりは、宿泊した子供だけにしてあります。それは、牛の世話もしないのに、乳をしぼらせたのでは、子供達が牛乳や酪農の仕事を軽視してしまう、いい所どりではない、本当の農業を伝える場にしたいという気持ちと、酪農家の苦労にこたえるために牛は血液を牛乳に変えて提供してくれる、酪農家と牛の関係を正しく真摯に発信してゆきたいと考えたからです。しかし、さすがに糞そうじともなると牛舎のあちらこちらから黄色い声があがります。

「ウゲー、くせー、きもちわりー」

子供達のさわぎを横目に知らん顔をしてそうじを続けます。すると今度は質問ぜめにあいます。

「ねえ、おじさん、牛は全部で何匹（傍点編集部）いるの」「この牛、何さいぐらいかな」「あっ、そうじしたのにまたしたよ。おじさんどうしよう」

終わることのない自然現象に子供達が音を上げます。夫は、この時を待っていたのです。

「牛は大きいだろう、おじさんの十倍はあるね。体が大きい分たくさん食べて、たくさん出す。でも、牛の糞は捨てないよ。肥料として人間が食べる野菜やくだものを育てる大地の栄養になるんだよ。それから、この牛ね、ここで産まれたんだけど、もうすぐ死を迎えます。年をとったからね。次は、肉になるんだよ。ここの牛は、乳が出なくなると肉になって、最後の最後まで人間の食料となって死んでゆく」

シーンとしずまりかえった牛舎の中に、子供達の悲しそうな瞳が夫を見つめ、その手は、やさしく牛の背に乗せられる。牛へのいたわりと私達へのいたわりが確かに感じられる時間です。

白いトレーに載せられた牛肉の並んでいるスーパーで、この肉にも命があったのですとさけんでみても誰も耳をかしてくれないでしょう。しかし、牛と共に時を過ごし、その命のぬくもりを体と心で感じた子供達には、スーパーの肉にも命があったことがわかるはずです。それは、ここを訪れた子供達からの手紙からも伝わってきます。

農業は、きつい、危険、汚いの３Ｋだといわれていますが、いったいだれが決めたのでしょう。きっと農業を知らない人でしょう。畑で汗し種まきが終わった時の感激、収穫の感謝、新しい命の誕生を見守った時の感動、私達が伝えなければならない３Ｋは、きつい、危険、汚いの３Ｋではない。感激、感動、感謝の３Ｋだと思っています。

人間が生きてゆくのに、必ず必要な食料、その食料にだって命が存在し、命を断って自分の命をつないでいることを、牛の代弁者として子供達に体験を通して伝えてゆきたいと考えています。

十年前まで、この町は、養豚も養鶏もさかんでした。しかし、いつしか姿を消してゆき、牛だけが残されています。これから先もこの地で酪農が続けられるよう、私達は、命のありかと、「いただきます」の意味を農業農村宿泊体験館きいれ牧場ミルク工房で発信しています。